

年齢発達の呪いから解き放つ

前川 良太



アトムに通う我が家の長男(4歳児)はどうものんびり屋で、言葉を理解したり気持ちを立て直したりというところに苦手が多い子です。特に予想外のことが起こるともうパニックです。

親の私には4歳児の発達ってこんな感じということは当然頭にあるので、どうもそれと比べるとできないことも多いし得意不得意の差が大きいのはよくわかっています。そこで3歳児からは加配をお願いしてサポートしてもらえるようなゆとりある保育士の配置にしてもらっています。

先日同じように加配対応をしているつばさの保護者と担任とともに面談をする機会を持ちました。今の子どもの姿を見つめることで、大人が子ども理解を深めるためです。その際に用いたきずなシートという書面には年齢の課題とのギャップ、いわゆるこの年齢ならできるだろうということが「できない」という姿が多く記録されていました。もちろん年齢発達をつかんだうえで、子どもの今を理解していくことは保育士にとっても親にとっても必要なことです。だけど、そんな現実をすんなり受け止めることは親にとっては簡単なことではありません。なぜなら我が子ほど困らないようにはみ出ないように、センターラインを歩んでほしいと願いたくなるのが特に今の私たち世代の親心だからです。先日のお母さんも面談の最後に「年齢の発達に追いついて、加配がいらなくなっていくことが目標ですね。」という言葉聞いて、どうも違和感がぬぐい切れませんでした。それはそんな風に思わせてしまう話し合いは本意ではなかったからです。

どうしても私たちは子どもたちのことを、未熟な存在として見てしまいがちです。うちの子のように発達に気がかりのある子は特にそうです。そして足りない言語力や忍耐力のような「〇〇力」を補いたくなるのです。しかし子どもの本当の育ちというのはそんな能力で測れるものでしょうか。

ある卒園児が「おれ結構勉強してるねん。だって勉強していい高校とかいい大学に行ったらやりたい仕事選べるって言うてたもん。」そんな彼の言葉を聞いて先述のお母さんとの会話に似た違和感を抱きそのまま彼に伝えました。「やりたい仕事があってそれに向かっていくのはとってもすてきなことや。だけど勉強できることと立派な仕事をするのが目標ちゃうで。どんなに勉強できなくてもどんな仕事してても、楽しく自分らしく生きるのがほんまの目標なんやで。」すると「さすが園長！」と茶化しながらも、かわいいタレ目をクシャッとしながら彼は笑っていました。

大人は子どもが困らないように、周りの子から後れを取らないようにという目で見えてしまいます。だけどそれがゆえにセンターラインに寄せて寄せてということは、その子らしさを認めず評価の対象にするということです。よく自己肯定感を持てるようになるためには、成功体験の積み重ねだと言われるけれど、本当はそうではありません。失敗しようとも、みんなと違おうとも、あなたはあなたでいいと承認してもらおう体験が、平均からはみ出す自分も許しながら自分らしく生きていけるのです。

年齢発達はあくまでも目安です。こうあるべきものではなく目安です。そこに子どもを合わせていくものではなく、子どものありのままの今を客観的に見つめるためのものです。子どもの育ちの行く末は「普通」になっていくということでは決してありません。それを願うと我が家の長男も足りないところだらけです。こうあらねばに沿っていくことはきっと子どもの生活をしんどいものにさせるし、親の私もしんどい子育てになってしまいます。

自分自身を振り返っても、真っすぐ人生を歩めた大人がどれだけいるでしょうか？得意不得意それぞれありませんか？違うからこそ面白いのです。こうあらねばという年齢発達の呪縛から抜け出して、今の子どもたちをまあよく見つめるようなやり取りを、これからたくさん重ねていきましょう。

※おみそ汁の会、大盛況でした。調理や食材のカンパありがとうございました。最終ページに写真掲載しています。つぎはどんなことしますか？楽しい企画をしましょう！

